

11月7日のまとめ

録音に失敗したので、概略をメモしておきます。

0. 全体の方針

外書講読のゼミをしますが、翻訳を目的にしたものではありません。また、古典を学ぶことを目的にしたものでもありません。古典とわれわれが学んでいる現代のアドラー心理学とを比較することで、現代のアドラー心理学をもっと奥深く理解することがひとつの目的です。もうひとつの目的は、この論文の周辺にあるさまざまな知識を学びとることです。

1. アンスバッハー博士について

ハインツ・アンスバッハーは1904年にドイツのフランクフルト・アム・マインで生まれました。アメリカに渡って、そこでアドラーと出会いました。その時期には学歴が低かったのですが、アドラーの勇気づけで1937年にコロンビア大学の大学院を卒業しました。

彼のもっとも重要な業績は、アドラーの著作をまとめて出版したことと、基本前提を整理をしたことです。Ansbacher & Ansbacher: "The Individual Psychology of Alfred Adler." Basic Books と Ansbacher & Ansbacher: "Superiority and Social interest." Basic Books に、アドラーの主な論文や著作がまとめられていますので、これだけを読むと、アドラーのオリジナルの考えがわかります。

基本前提はこの論文の中でも丁寧に説明されますが、アンスバッハー以前には、いまのようにコンパクトに整理されていませんでした。アメリカのアドレリアンだけでなく、ドイツのアドレリアンもこの基本前提を認めています。

2. アドラーの言葉

The most important question of the healthy and the diseased mental life is not **whence?** but, **whither?** . . . In this whither? the **cause** is contained.

ちょっと古い単語が使われていて、whence は「どこから」で、whither は「どこへ」です。ドイツ語の woher と wohin の雰囲気を生かしたのだと思います。

「原因 cause」についてですが、アリストテレスが「四原因説」ということを言っていて、1) 形相因 causa formalis、2) 質量因 causa materialis、3) 始動因 causa efficiens、4) 目的因 causa finalis の4つです。古代・中世には形相因と目的因が重視されましたが、近代になって質量因と始動因が重視されるようになりました。アドラーは始動因に代えて目的因を復活しました。

3. 前文

The Adlerian school of **psychiatry**, represents **a unique theory** of personality, psychopathology, and psychotherapy and **corresponding practices**, **which** Adler named Individual Psychology.

Adlerian school of psychology (心理学) ではなくて psychiatry (精神医学) という言葉が使われているのは、1) この論文が "American Handbook of Psychiatry" という本に掲載されているからか、2) これが書かれた時代には clinical psychology はまだ一般的でなく、心理臨床も精神科で行なわれることが普通だったからでしょう。

a unique というのは、1) theory of personality、2) theory of psychopathology、3) theory of psychotherapy and corresponding practices の各々について unique

がかかっているのだと思います。

corresponding practice というのは、psychotherapy を 1 対 1 の心理治療に限って使い（そういう時代だった）、たとえば『パセージ』だとかサイコドラマとかアートセラピーとか、そういうものを含んでいるのだと思います。

which の先行詞は、冒頭の the Adlerian school of psychiatry であって、直前の corresponding practice ではないでしょう。ドイツ語だと関係代名詞は先行詞と性と数が一致するので離れていてもわかりやすいのですが、英語では、ときどき紛らわしくなります。

3. 人間主義

1. It is consistently **humanistic**, rejecting analogies from physics, chemistry, or animals (except anthropomorphized animals from fables), while stressing **man's striving to overcome difficulties** as an aspect of the general **evolutionary principle**.

humanistic は「人間学的」と訳すことになっています。これについては、「資料 2」を参照してください。アンスバッハーは人間学派（第三勢力）にシンパシーをもっていました。私はかならずしもそうではありません。

man's というのは、現在はもう書けなくて、person's と書くでしょう。うるさいことです。

striving to overcome difficulties というのは、今では目標の側から考えますが、もともとは「困難を克服する」という側から考えるのが普通でした。それについてはアンスバッハーが後の方で書いています。strive というのは「奮闘努力する」というような意味の言葉で、もともとは「喧嘩する」「争う」という意味だったそうです。「目標追求」という和訳は、この

感じがあまり出ていません。

evolution を「進化」と訳していいのか、疑問があります。原語はラテン語の *evolutio* で、「回転させて開く」程度の意味です。現代英語では、**the gradual development of something**（オックスフォード英英辞典）で、「発展」はするかもしれないけれど、「進歩」なり「進化」なりするかどうかわかりません。**evolutionary theory** を「進化論」と訳したのは、よくないと思います。